

ものがたり～京・千本、朱雀の「空・間」～

<“千年の都”に思いを寄せ…思い描く“懐かしい未来”>

心を「タイムマシン」に乗せて…

◆想像の翼はばたかせ、千年の時を遡ってみましょう。すると…

…見えてきたのは、春風にそよぐ柳の枝々。待ちかねたように芽吹きの時を迎え、日に日に濃さを増してきたであろう若やいだ緑が、しなやかな動きで風の通り道を教えています。風の道はまた、人々の道。賑わいが耳に心地よい音となり、心楽しく届きます。造営なって間もない平安京、ここはその「都大路」の地。南北一直線に延びた平安の京の朱雀大路。その幅は「二十八丈」と言いますから、現代の数字に換算して85メートルになんなんとする宏壮さ。のみならず、大路に沿って植えられた柳の木が、見事なほどに優美さを加えています。

◆木々の連なりに従うように目をやれば、はるか遠景に洛北の峰々の山容。視線を戻せば、思いがけず間近な距離に、荘重にして華麗な「朱雀門」の姿を見ることができるよう。向こう側は、帝のおわします、そして政（まつりごと）の場である大内裏です。

出仕する位の高い貴族の車列なのでしょうか、大路が一段の賑わいを見せ始めます。牛車の中にして、お供の者の行進もゆるりと。馬上にある人々は、都の警護の任に急ぐ侍の一団に違いありません。ふと見れば、立派なお姿のお坊様もお通りになります。見慣れない衣装の方々は、異国からの使節団。…かもしれません。

◆そう、これらはあくまでも想像の産物です。けれども、今日目にする「千本通」はかつての都大路であり、[紅椿 それいゆ]の現在の立地も平安京中心部に程近い場所に相当します。広く知られてはいないながら、歴史的事実のようです。言うなれば、確かにここは「朱雀の地」なのでございました。

「ストーリー」は「ストリート」から

◆もちろん、だからと言って、私たちの「空・間」が特別のものだとか、そのような尊大なことを申し上げるつもりは微塵もございません。実際、今日の千本通は、このあたり（[紅椿 それいゆ]が含まれる区域の行政上の町名は「壬生御所ノ内町」です）では、大路というよりもむしろ小路。自動車なら一方通行と指定された細めの幅の道路の姿に、往時の宏壮にして優美な、都のメインストリートの面影を探すことは困難でしょう。ただ、私たちはそれを「常無きこと」として悲しむつもりはありません。むしろ、「路」（＝みち／大路・小路・路地を含むあらゆる「道」）が「路」として、「通」（＝とおり／私たち、すなわち現代の京都での「路」の呼び方の通例）が「通」として、千年の時を超えて存続し続けている、そのことをこそ、寿ぎたいと思うのです。

◆京都は自然発生的に成立したのではなく、計画的・大規模に造営された人口都市でした。この地に都が移されたのが、桓武天皇の御世、延暦13年と言います。西暦に直すと794年と

のことですから、以来、千年どころかおよそ 1220 年の時が経過したわけです。その間、「路」にも栄枯盛衰はあり、事実、平安京の比較的早期のうちに都の中心は東へと移り、かつての大内裏を中心とした朱雀の地は荒れ野（朱雀大路南端の「羅城門」は 980 年に倒壊して、以後、再建されることはなかったそうです）となっていた時代すらあったとのこと。けれども、時代や歴史がどう変われ、京の都にとって、南北と東西に配された「路」は都市の基本構造を形づくる最も重要な要素の一つであり、そのような存在として存在し続けました（今日も、きっとそうです）。

◆時代・歴史・都市。一見、自律的に動くと見えて、実はそこには隠れた主人公がいるのではないのでしょうか。言うまでもなく、「人」だと思えます。都は人が叡智を傾けて生み出したものであり、歴史と時代を動かすのは、有名無名に関わりなく、時にささやかに、時には逞しく生き抜こうとする「人々」の、その力の連なりに他ならないはずです。

あらゆる人々の日々の暮らしと喜怒哀楽。その中で生まれ、また消えていった、多様で多彩な「ものがたり」のすべてを、路は見続け、支え続けてきました。あるいはまた、主人公である「人」の依って立つ基盤として、ものがたりそのものを生み出してきたのかもしれない。今に至るまで。そして、これからもずっと…。

「通」と共にあること。「人」と共にあること。

◆私たち家族は全員が京都生まれ・京都市育ちです。しかし、最初から「朱雀の地」に慣れ親しんでいたわけでは、必ずしもありません。市内の別の街で生まれ、育ち、出会い、家族となって暮らしてきました。それが、あるきっかけからこの場所へと転居。

移り住んでみると、建物も少し変わった構造と意匠をしていて、特徴的なこの「空間」を活かして、前々から心の片隅で温めていたアイデアを実現できるかもしれない。と、考え始め……。そうしたことの積み重なるのすべてが「縁」の始まりとなり、不思議なことに、更に様々な「ご縁」を呼び寄せていきました。

このようにして、[紅椿 それいゆ] という「空・間」(…“創造する人”と“想像する人”のための…) は開設の運びとなり、店主として、私は「空・間」の運営という未知の領域へ歩みを進めることとなったのです。

◆たくさんの不思議なご縁と、未知の可能性に挑戦する機会とを与えてくれた（その発端となった）千本通と朱雀の地に、[紅椿 それいゆ] と私（そしてまた、家族の皆と [紅椿 それいゆ] に関わってくださるすべての皆さまを含めた意味での『私たち』）は、大いに感謝しなければなりません。そして感謝の意を込め、二つのことを考えていきたい。また実践していきたいと思えます。

一つは、この地にしっかりと根を張り、地域と共にある「空・間」（と、敢えて呼んでいます。通常のカテゴリーとしては“ギャラリー”“スペース”もしくは“サロン”にとらえて下さってかまいません）であること。

◆長大な時間を生き抜いてきた千本通は、よく見てみれば、なかなか個性的で魅力的な「路」です。歴史の作用の必然の中で育まれたのでしょう、界限にはいくつもの銘木店が並びます。料理と製菓の専門学校があり、未来目指して瞳を輝かす若者たちが往来します。西の方には「空・間」の内側からも望むことのできる夕日が沈みかけるころ、通に交わる「路地（ろおじ）」のそこここからは、“遊びをせむとや生まれけむ”とて、子供の声も聞こえてきます。

近隣に目をやれば、二条城に壬生寺、歴史の舞台ともなった名高いスポットが、あるいはま

た、三条通商店街のような気さくで生活に密着した「通」もすぐそばです。二条の駅や四条通は、京都の西方面への玄関口のような位置づけですし、各駅の周辺には、ちょっとオシャレ・個性的なカフェや食べ物屋さん、様々なお店もあって、意欲的で柔軟な運営ぶりを感じます。更にはいくつかの大学、また「朱雀」の名を冠した学校も点在します。

こうした地域の個性を知り、日々味わいながら、一方で、その個性～「京都・千本通沿い・朱雀の地」の個性～の一翼を担うような存在にまで、[紅椿 それいゆ]自身が成長していきたいと望んでいます。それも、できる限り「地域の方々と手を携える」。そんなやり方で。

◆このように地域にしっかりと根差しつつも、同時に、ここ朱雀の地から、もっとずっと広い世界へと、常に心の通路を開いていようと思います。(※思えば「通路」という言葉、「通」と「路」から成り立っておりますね)

かつて平安京のメインストリートであった朱雀大路は、単に、都の入口である羅城門と宮城の正門としての朱雀門をつなぐだけの存在ではなかったはず。「路」はその先の「路」へ、この国のあらゆる場所へと続き、更には海をも超えて、より広大な世界へと「通じて」いる。そう考え、感じ、その直感と理解から何かを成し遂げようとした人々が、少なからず存在したのではないのでしょうか。

◆[紅椿 それいゆ]の「空・間」は、魅力的な独自の美を生み出す方々(=“創造する人”)と、とらわれのない自由な心で美を求め、発見しようとする皆さま(=“想像する人”)とが、作品や作家その人を介して交差し交流する場でありたいと思います。そのために、どのような個性にも寄り添う「空」と、人と人とを結び合わせる「間」であることを目指します。

だからこそ、ジャンルやエリアなどの何物にもとらわれることなく、日本全国を(いや、気持ちとしては全世界を)見渡す、広く透明で柔軟な視野と視点を持つことが必要。…時に、そう自らを戒めております。

◆私たちの「空と間」は、同時に「通と路」でもある。

千本通・朱雀の地と、積み重なった千年の時とが、あるいはそんなことを教えてくれているのかもしれない。